

東北アジア学術交流懇話会ニューズレター

うしとら

第45号

● 目次 ●

特集：「東北アジア学術交流懇話会 総会」・「一般公開 講演会」東京開催	1
「総会」概要報告： 会則変更案提示	2
「一般公開講演会」概要報告： メインテーマ『東北大学のロシア研究戦略』	3~8
[講演Ⅰ]「グローバル 30 プログラムと東北大学におけるロシア交流推進」	3
[講演Ⅱ]「宮城県のロシア経済交流と今後の展開」	5
[講演Ⅲ]「東北大学東北アジア研究センターの最近の活動」	6
[講演Ⅳ]「東北大学東北アジア研究センターにおけるロシア研究活動」	7
編集後記	8

特集

「東北アジア学術交流懇話会総会」・「一般公開講演会」 2010.5.7 東京開催 概要報告

平成 22 年 5 月 7 日、東北大学東京分室（JR 東京駅日本橋口、サピ
アタワー 10 階）で、東北アジア学術交流懇話会の総会（10:00-10:30）、
ならびに本会主催の一般公開講演会（10:40-13:00）が開催された。

総会は、ご多忙のなか西沢潤一会長の出席を得つつ、主に関東在住
会員の方々、学内外の理事・委員の会員総勢 30 余人で厳粛に執り行
われ、その後講演会時には一般の方々にも参加いただき 50 人用会場
が満席の盛会となった。

なお、今回は在日ロシア連邦大使館の文化担当部長 A.G. フェシェ
ン氏、ならびに日ロ交流協会、日ロ貿易協会、日ロ協会から、会長・
副会長の要職の方々をはじめ多数ご参加を戴き、また遠くからの個人
会員の方の参加いただきました事、感謝申し上げます。

西沢潤一会長ご挨拶

総会・講演会それぞれの冒頭に西沢潤一本会会長（右写真）
からご挨拶があり、東北アジア研究センターなどの設立経緯の
お話と、今後の日ロ学術交流発展へのエールを頂いた。要旨を
以下に纏める。

・ロシアは日本にとっていわゆる一衣帯水の隣国で、民族・文
化的にも大変深い関係にある事を我々は常に考えなければなら
ないとの思いに至り、東北アジア研究センターの発足（1996 年）、
東北大学初の海外拠点であるノボシビルスクのシベリア連絡事
務所開設（1998 年）、さらにセンター教員と一般人とから成る



満席の講演会会場



東北アジア学術交流懇話会の創設（1999 年）に力を注いだ。

・これらの具体化には、篤志家からの寄付金（小松資金）の存
在、ならびにロシア科学アカデミー・シベリア支部無機化学
研究所前所長クズネツォフ教授の力添えの存在とが大きな
原動力となった。

・シベリアの地下資源の有効活用など理工系のテーマだけで
なく、永久凍土地域特有の考古学など文系分野などでもユニ
ークな共同研究テーマがまだまだ残っている。ノボシビルスク
の優秀な研究陣とのさらなる学術交流の発展を期待する。

・これからの日ロ両国の健全な発展を遂げるためにも、より
深い信頼関係を構築して欲しい。例えば、ロシアの多
くの学者たちは専門外であっても、北方 4 島問題などなど
に関してしっかり勉強して真摯に議論してくれる。皆さんも
昔からの経緯などを十分普段から勉強しておいてよく話合
うべきだ。

・今後の本学・センターの日ロ学術交流活動、ならびに本会
の大きな発展を期待する。

平成22年5月開催（於 東京）東北アジア学術交流懇話会 総会・一般公開講演会 特集号

「東北アジア学術交流懇話会 総会」の概要報告

4月に行われた理事会で本会会則の変更（総会機能の強化）と決議され、まず会員数の多い東京地区で総会を開き会員諸氏のご意見を伺う事になった。西沢潤一会長のご挨拶（概要→表紙）の後、総会用資料をもとに佐藤源之理事長により開催経緯の説明がなされ、5件の議事が進行された。

総会プログラム 平成22年5月7日 於 東北大学東京分室

- ・10:00-10:10 東北アジア学術交流懇話会 西沢潤一会長挨拶
- ・10:10-10:35 議事

1. 平成21年度活動報告 2. 平成21年度決算報告 3. 平成22年度予算案 4. 平成22年度活動計画 5. 会則の変更について

会則変更案提示；総会の機能向上・毎年開催など

<はじめに>

東北アジア研究センターのこれまでのロシアとの交流実績等が背景となつて、東北大学とロシアとの学術交流関係はさらに大きく飛躍しつつある。これは本懇話会の目的（会則第3条）に即した、ひとえに会員皆様の長年のバックアップによるものと感謝申し上げます。

ところで、今後さらに本会をステップアップさせるためには、会則の一部を変更する必要がある。

<今総会の主目的：会則修正のご意見を>

本会会則には、総会の規定はあるが定期的開催の記載はなく、他方毎年1回は開催と記されている理事会に関しては会則通り毎年開催し諸事を決議している。今回の総会に先立っての4月開催の理事会では、“沢山の会員の方そして沢山の予算を預かっている性格上、理事会が全てを取り仕切る体制は若干現状にそぐわなくなっているのでは”との提案がなされ、通常の団体が採用している様に、総会開催を定例化し総会を議決機関とすべき事が決議された。そこで今回の総会を開催し、（現行会則に則り）理事会決議内容を報告した上で会員諸氏からのご意見等をお聞きし、本日のご意見等を参考に、後日最終的に会則修正文を決定する予定である、との説明がなされた。

以下、総会資料に従い、議事が進行された。

<議事1：平成21年度活動報告>

昨年度中に実施した刊行物配布、講演会等への支援等について具体的な説明が成された。

<議事2：平成21年度決算報告>

主たる収入が会員会費であること、単年度の活動費支出は単年度収入に見合うような活動を行っているが、旧年中の蓄積があり前年度繰越額が大きくなっていること、この件に関しては今後講演会等を積極的に開催するなどして会員に還元して行くことを理事会で検討しつつある、などの報告が成された。



総会会場



<議事3：平成22年度予算案>

会員の大きな変動は無いものとして理事を中心に例年同様の活動を企画していること、総会・講演会等の開催地は、会員の多い仙台・東京に限らず、その他の地域でも極力実施するよう考えて行くなどの説明が成された。

<議事4：平成22年度の活動計画>

総会を今後活動の一番大きな会議として定期的に開催すること、一案としては、東北アジア研究センターが毎年12月初旬に一般講演会を仙台で開催しているが、それを本会が協賛しさらにその終了後の時間帯に総会を定期的に開催するという形も一つの案としてあること、その意味で今年度平成22年度の総会については今回の5月と、さらに12月に開催を予定していることなどの説明が成された。

<議事5：会則の変更について>

会則資料をもとに、理事会で考えている会則の変更について詳細説明がなされた。大筋は、これまで理事会が行っていた議決に関する内容を総会に移す事と、理事会ではなく重要な総会を定期的に開催する事である。それに伴い、会計、事業報告等についても、これまで理事会で実施していたものを総会に移す。

以上の理事会議決としての本日の改正案の説明に対し参加者からご意見を戴き、それを参考に6月にでも再度理事会を開催して、最終的に会則の変更を行うという手続きを取りたい。

次回の総会（今年度は12月に仙台で開催予定）は、新しい会則に則って開催し議事進行されるべきと考えている。

以上の説明に対し、本総会では出席者全員の賛同を得た。今後ともご意見等がある場合には、懇話会事務局にお知らせ戴く事と、理事会ではこの修正案の細部にわたる案文検討を慎重に進めて行く旨の説明があり、総会は終了した。

平成22年5月開催（於 東京）東北アジア学術交流懇話会 総会・一般公開講演会 特集号

東北アジア学術交流懇話会主催「一般公開講演会」の概要報告

総会に引き続き一般参加者にも入室戴き、メインテーマ「東北大学のロシア研究戦略」にて講演会が行なわれた。東北大学は昨年度に文科省の国際化拠点整備事業の拠点大学に採択され、留学生受入れ体制拡充などキャンパスの国際化が強化されつつある。

この講演会の目的は、東北アジア研究センターがシベリアに海外拠点を開設し活動を行ってきた実績を背景に、今後東北大学と東北アジア研究センターがいかに協力しながらロシアとの学術交流を進めるかについて、広く一般の方々に紹介するものである。

なお、宮城県は他の自治体には類を見ないヨーロッパロシアとの経済交流活動を開始しているのので、併せ報告をお願いした。

先ず西沢会長からご挨拶（概要→表紙）をいただいた後、4人の講師による講演がなされた。以下、講演概要を報告する。

講演会「東北大学のロシア研究戦略」プログラム 平成22年5月7日、於 東北大学東京分室

・10:40-11:00 東北アジア学術交流懇話会 西沢潤一会長挨拶

・11:00-12:40 講演（1件20分+質疑5分）

【講演Ⅰ】「グローバル30プログラムと東北大学におけるロシア交流推進について」 木島明博 東北大学 副学長・ロシア交流推進室長

【講演Ⅱ】「宮城県のロシア経済交流と今後の展開」 千葉章 宮城県国際経済・交流課 副参事兼課長補佐

【講演Ⅲ】「東北アジア研究センターの最近の活動」 佐藤源之 東北大学東北アジア研究センターセンター長

【講演Ⅳ】「東北アジア研究センターにおけるロシア研究活動」 岡洋樹 東北大学 東北アジア研究センター副センター長

講演Ⅰ

「グローバル30プログラムと東北大学におけるロシア交流推進について」

= 「グローバル30」採択、「東北大学ロシア代表事務所」、「ロシア交流推進室」 =

木島明博 東北大学副学長（昨年11月新設された「ロシア交流推進室」の室長も兼務）から、21枚のスライドを用いての講演がなされた。



< 私とロシアとの関わり >

1992年に当時の西沢潤一総長率いるロシア科学アカデミー・シベリア支部 第二回訪問団に参加する機会があり、ノボシビルスクのアカデミータウンに果てしなく林立する研究棟群ならび

にそこで待ち受け歓迎してくれた非常に純粋で親切な学者たちに深い感銘を受け、それ以来多くのロシアの学者たちとの交流を深めている。

< 国際化拠点整備事業「グローバル30」(=G30) >

ロシアの教育省などから要請があり、先週から今週にかけモスクワに出かけG30の説明に行き、本日は帰国したばかり。その場には、ロシアのOECD（経済協力開発機構）関係者も出席しており、日本が推進しようとしているG30プロジェクトにロシア国家としても大きな関心を持っている事が感じられた。その時に用いたスライドなどで以下説明する。

2008年に日本の国際化を目的とした「留学生30万人計画」が閣議決定されたが、その具体的な実現への方策として、2009年に文部科学省は特に大学のグローバル化に重点を置いた「G30」の公募を行った。大学の機能に応じた質の高い教育の提供と、海外の学生が我が国に留学しやすい環境を提供する取組により、必然的に日本人学生も留学生と切磋琢磨することになり、国際的に活躍できる高度な人材を養成し得るとしたものである。同年7月に東北大学など13大学の申請が平成21年度分として採択され（7国立大学；東北・筑波・東京・名古屋・京都・大阪・九州、6私立大学；慶応義塾・上智・明治・早稲田・同志社・立命館）、英語による授業等の実施体制の構築、留学生受入れに関する体制の整備、戦略的な国際連携の推進（海外拠点の設置 など）の3点の取組を財政支援の下に実施する事となった。

<「海外大学共同利用事務所」>

G30 公募申請時に、義務ではないが「海外大学共同利用事務所」としての機能を持たせ得る海外事務所の候補を挙げることに要望があった。本学にはシベリア連絡事務所としての共同ラボラトリー、モスクワには流体研の分室があるので、交通の便も考慮しモスクワに「東北大学ロシア代表事務所」並びに「ロシア海外大学共同利用事務所」を構えることとして申請した。その結果、他の大学と共に下表の8カ所を指定され、本学はここを拠点に、日本の大学の紹介、ロシアの大学の窓口として内外の紹介など行うことになった。なお、4月29日にモスクワ大学と覚書を交わし、本学代表事務所を設置することになった。

東北大学	東北大学ロシア代表事務所 (ロシア/モスクワ)
筑波大学	北アフリカ・地中海連携センター (チュニジア/チュニス)
東京大学	東大ハイデラバードオフィス (インド/ハイデラバード)
名古屋大学	名古屋大学ウズベキスタン事務所 (ウズベキスタン/タシケント)
京都大学	ハノイ事務所 (ベトナム/ハノイ)
九州大学	エジプト大学共同利用事務所 (エジプト/カイロ)
早稲田大学	ヨーロッパセンター (ドイツ/ボン)
立命館大学	インド・ニューデリーオフィス (インド/ニューデリー)

<「ロシア交流推進室」の設置：2009年11月>

これまで財政的課題などを抱えつつも、東北アジア研究センターが主に対応して来たロシア科学アカデミー要請の共同研究を、より効果的に推進するため全学的体制で検討した結果、木島副学長を室長とし東北アジア研究センター教員を含む全学的メンバーから成る「ロシア交流推進室」を設置することとなり、活動を展開しつつある。当面の使命は、東北大学とロシアの大学・科学アカデミーシベリア支部等との全学的な研究・教育交流を推進することと、ロシア海外大学共同利用事務所を運営すること等である。

<「G30」：本学としての具体的な進め方>

本学のグランドデザイン（井上明久総長の基本方針、井上プラン2007）の基底には、世界に開かれた東北大に、との‘国際性’が強く打ち出されているが、G30と云うサポートが得られた事により、その実現性が加速される事となった。つまり、全て英語だけで行う授業の英語コースは今まで学部には無かったが、ここ数年内に3学部3コースを新設し、大学院も既存の3倍以上の13コースを増設する事とし、留学生の数（現在1500名）については、今後10年間で3000人に増やす予定でキャンパスの国際化を推進することになった。他方、日本人学生の英語コミュニケーション能力向上も同時に図るため、短期間海外研修や海外インターンシップなどの拡充を行って海外への留学促進をも同時に進める。

<「G30」：運営体制>

上記の「ロシア交流推進室」の他、「G30運営会議」、「G30実施委員会」、さらには全学からの連携・協力の下に、留学生の英語コースを運営する「国際教育院」を新設し活動を展開中である。

この4年後には我々の大学の中に、あたりまえのように留学生と日本人学生が混ざって真に国際的な大学になるよう努力していきたい。

<< 質疑応答 >>

Q1：G30 留学生の学費関係？

→A1：従来と同様に国費留学生としての枠があるが、人数が少なく急遽プレジデントフェロースHIPという本学独自の制度をつくり、今のところ留学生計100人に対して支援を行うことになった。勿論これでも不足なので、さらにその他の方法も検討中。

Q2：大学教育のカリキュラムに実社会現場での教育も入れるべきと考えるが。

→A2：実は、今産業界とコンタクトをとってG30全体で検討中。



Q3：産学の取り組みで、大企業のみならず中小企業とも連携を持つべき。

→A3：これからの産は、中小企業も海外に出るのは必然であり、例えばシベリアから来た留学生も日本の企業に就職してほしく、しかも中小企業に行く場合も増えるだろう。近日中に各大学のG30関係者と大小の産業界人との話し合いを持ち、相互理解を深める予定がある。

講演Ⅱ

「宮城県のロシア経済交流と今後の展開」

＝「地域間交流のモデル」との評価を得ている、宮城県とニジェゴロド州（欧州ロシア）との経済交流＝

宮城県国際経済・交流課の千葉 章氏から12枚のスライドを中心に講演がなされた。



＜講演目的＞

宮城県は他の自治体には類を見ない欧州ロシアのニジェゴロド州と経済交流を数年前から開始した。

手探り状態で始めてまだ軌道に乗るまでには至っていないが、本件のケースは「地域間交流のモデル」として評価も得ているので、ロシア研究の参考までに紹介する。

＜ニジェゴロド州＞

沿ヴォルガ連邦管区にあるニジェゴロド州はヨーロッパロシアの中央部に位置し、宮城県の約10倍強の面積に人口1.5倍ほどの336万人が住んでいる。主要産業は機械製造・鉄鋼など。中心都市の州都ニジニ・ノヴゴロド市（人口約128万人）はモスクワ東方約400kmにあって、モスクワ、サンクトペテルブルク、ノヴォシビルスクに次ぐロシア第4位の都市である。ソ連時代はゴリキ市と呼ばれ、軍需産業の存在のため閉鎖都市とされ、一般には実情があまり知られてなかった。「ヴォルガ」ブランドで有名な「ゴリキー自動車工場」がある。

＜「地域間交流のモデル」との評価を得ている＞

ところで、2003年に小泉首相とプーチン大統領間で「日ロ行動計画」が策定され、その中に「両国は地域レベルでの交流の進展を図る」との項目があるが、今回の宮城県とニジェゴロド州との日ロ交流は「地域間交流のモデル」として日ロ政府などから評価を得ている。

- ロシア連邦議会連邦院ミロノフ議長（ロシアNo.3）が初来日の際に本県を唯一訪問（平成21年1月）
- 中曽根外務大臣（当時）がミロノフ議長との会談で本県の交流に言及（平成21年1月）

- プーチン首相が来日時の麻生首相（当時）との会談で本県交流に言及（平成21年5月）
- NHK「クローズアップ東北」で本県のニジェゴロド州訪問を特集（平成21年6月）、この他新聞、雑誌等

＜交流経緯＞

宮城県とニジェゴロド州は首都からの距離も同程度との共通項があるなどの理由から、平成18年11月にニジェゴロド州選出連邦議員団の宮城県訪問があり、意見交換を行った。平成19年4月にシャンツェフ知事を団長とする37名の訪問があり、宮城県の村井知事との間で「協力に関する覚書」の調印を行い交流が始まった。以下項目を列記する。

- 「宮城特産品フェア」を現地で開催、ニジェゴロド州知事が参加（平成20年2月）
- 県内企業や大手商社等が「みやぎロシア貿易促進コンソーシアム」設立（平成20年10月）で大きく飛躍
- 宮城県での開催「ビジネス&テクノ東北2008」にニジェゴロド州がブース出展（平成20年10月）
- 県副知事団長の本県訪問団（総勢28人）同州訪問、共同宣言書調印（平成21年5月）
- モスクワ（宮城セミナー開催）、サンクトペテルブルク（鉄道会を訪問し物流状況を調査）にも訪問
- 「展示商談会」「料理人講習会」を現地で開催、県内企業が同行（平成21年11月）
- ニジェゴロド州政府起業課長本県訪問、本県中小企業支援政策等研修（平成21年12月）

＜ニジェゴロド州との交流指針＞

実質的な成果を得るため、3指針をあげている。

- (1) 先ず行政間の交流基盤を強化し、形成された行政間の「橋」を活用して企業が販路開拓
- (2) 経済を基軸とした交流、つまりWin-Winの交流
- (3) 産学官の重層的かつ裾野の広い交流の確立

なお、当面欧州ロシアと極東ロシアの両面展開を並行して行い、その相乗効果を発揮させてニジェゴロド州をゲートウェイとし、ゆくゆくは巨大市場の欧州ロシアに展開して行く。

＜今後の展開＞

- 村井嘉浩宮城県知事ロシア訪問（平成22年5月）⇒経済が柱の「新協定書」の調印
 - ニジェゴロド州政府職員の本県への受入れ⇒本格的経済交流下準備（中小企業支援施策等研修）
 - 「マトリョーシカ」と「こけし」とのコラボ⇒両州県の伝統工芸品の販路開拓
 - 宮城県本格食材の供給と輸送ルート開拓 ⇒ニジェゴロド州の支援で共同プロジェクト化
 - 宮城県でニジェゴロド州の画家の展覧会開催⇒文化・芸術面での相互理解
- …そして、ゆくゆくは東北地方（含新潟）と沿ヴォルガ連邦管区の交流に拡大…
- 上記の様に、行政サイドから実施できる事を展開し、徐々に民間にすそ野を広げて行きたい。

<< 質疑応答 >>

Q1：小規模ではあるがトムスク州も知事が来日し、日本語で書かれた詳しい広報誌を作成するなど上手にPRしている事を参考までお知らせする。

→A1：大変参考になるお話である。ニジェゴロド州ではまだその段階までは至っていないようであるが、いずれそのようなことも必要になるかもしれない。

Q2：宮城県の折角の交流努力を、もっと広く他県にもPRし一緒にやった方が良いのでは。

→A2：本県のプロジェクトには外務省のロシア課が地域間交流と云う事で大きな後押しを載せており、宮城県としても様々な機会を捉えてPRしていきたい。



講演Ⅲ

「東北アジア研究センターの最近の活動」

= 東北アジア研究センターのこれまでとこれから =

講演3番目は、東北大学 東北アジア研究センターセンター長の佐藤源之教授から、20枚のスライドを中心に説明がなされた。



これまでの地域研究の方法は、それぞれの地域の歴史、地理とか個々の国々について行なうやり方だったが、現代的には余り意味を持たなくなってきた。それよりも国と国との関り合いをより重視した、地域全体をとらえる研究と云うものが必要となっている。そこでロシアをも含めた東北アジアを枠組みとした地域研究を行い地域理解の要請に応えようとした。

< 具体的な研究視点 >

従来の研究視点は主として 地域表象（地域住民・国家の認識）ならびに地域動態（地域の歴史の変容と地域内の相互関係）であるが、それに加えて地域環境（国境を越えた地域の環境問題・自然変動の計測と研究）と地域貢献（地域への研究成果の還元・社会への貢献に関する研究）の視点からの研究をも行い、東北アジア総合地域学の創出を目指す。方法論的に文理融合の研究が必要となるのも特徴である。

< 機構 >

基礎研究部門（ロシア・シベリア-研究分野、モンゴル・中央アジア、中国-、日本・朝鮮半島-、地域生態-、地球化学-、地域計画科学-、環境情報科学-、資源環境科学-）、プロジェクト研究部門（現在、9件の研究ユニット）、研究支援部門（学術交流-分野、情報拠点-、海外連携室）の3部門から成る。このプロジェクト研究部門は、通常は各分野から成る基礎研究部門に籍を置く研究者がテンポラリーな課題に対して時限を付けて申請し実行するもの。現代的な課題を素早く解決するために設けた新しい仕組みで、限られた定員で早期の問題解決に向いている。また、研究支援部門の学術交流分野は特徴的な仕組みで、センターとして常時2名の外国人客員教授として4ヶ月間滞在して頂くもの。結局外国の教授クラスを年に6名招聘している。しかも、センターの研究テーマと関連があるものなので、常に研究領域の拡大も図り得る。

< はじめに >

先程の西沢会長のご挨拶にも触れられていた如く、1992年にロシア科学アカデミーシベリア支部との大学間協定を締結の後、東アジアと北アジアの地域を対象とする研究機関として1996年に東北アジア研究センターが設置され、各種の研究に関わって来た。特に1998年にノボシビルスクに開設したシベリア連絡事務所は、学内で最も早く開設した事務所でもあり、現在も共同ラボラトリーとして機能し続けている。以下、東北アジア研究センターが何をし、何をしようとしているのかについて述べる。

< 東北アジアを研究する目的 >

ソ連圏社会主義体制の崩壊・中国の改革開放の進展は、その周辺社会の枠組みをも大きく変化させ、日本も大きな影響を被った。こ

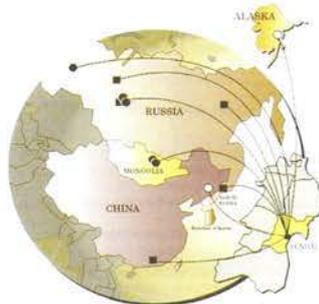
< 学術協定による海外学術機関等との連携強化 >

センターが関与している大学間協定数4件、部局間協定数10件で、詳しくは次表に示す。

大学間協定および部局間協定

協定月日	相手方機関(国名)
2007.3.26	ワルネ共和国科学アカデミー人文科学研究所(露)
2005.10.10	IF71(国際技術投資振興財団)(露)
2005.9.1	ロシア科学アカデミー極東支部経済研究所(露)
2003.7.3	ノボシビルスク国立大学(露)
2002.10.1	ロシア科学アカデミーシベリア支部 スカチョフ森林研究所(露)
2002.10.1	ユゴラ情報技術研究所(露)
2001.11.16	モンゴル科学技術大学(モンゴル)
2001.6.25	広東省民族研究所(中国)
2001.3.1	吉林大学(中国)
2000.8.21	モンゴル国・科学アカデミー(モンゴル)
1999.1.12	アラスカ大(アメリカ)
1992.8.10	ロシア科学アカデミーシベリア支部(露)

●: センターが世話部局となった大学間協定 ○: センターが協力部局となった大学間協定 ■: 部局間協定



2. 歴史資料を千年後まで残すための取り組み
3. 電波の目で見える東北アジア
4. 活発化する東アジアの人の移動

< 学内共同活動例 >

センターと本学内文系部局との共同活動例として、「東北大学リベラルアーツサロン」を始めた。市民を対象に2ヶ月に1度開催するもので、一般的に関心の大きいテーマについて文系講師が講演の後に、聴衆との質疑応答などの対話を中心に進められ、さらに深く考えさせるようにした催しである。この、リベラルアーツサロンの運営とか情報発信のために、センター内に「コラボレーション・オフィス」を昨年センター内に設置している。また、センター内に「東北大学防災科学研究拠点」を昨年度から設けている。これは先程研究例として掲げた、歴史資料を千年後まで残すための取り組みを含む拡大テーマで、災害発生後の心のケアなどには災害心理学等文系の研究も必要など、学内の文系理系の沢山の先生方、ならびに地方自治体とも連携した取り組みである。

< センターのロシア連絡事務所 >

1998年に開設した東北アジア研究センターによる運営のシベリア連絡事務所(2008より共同ラボラトリー機能として存続)、ならびにグローバル30としてセンターが主体的に運営協力するモスクワ連絡事務所(2010)の2か所がある。

< 教育研究活動状況 >

科研費申請率 339.9%(全学2位)、科研費採択率 104.5%(全学平均49.5%)、日本学術振興会特別研究員(教員1名当り)採択率 0.14名(全学3位)

< 研究例 >

プロジェクト研究部門ユニットのうち、次の講演で説明のあるロシア関係を省き、以下4件の例示、説明が成された。

1. 東アジアの典籍(変幻自在に情報を保存する器の物性を考える)

< 今後の進め方 >

東北アジア地域研究の要請は強まっており、その要請は今後さらに加速される事は必然である。本センターはそれら要請を的確に把握し、内外の協力を得ながら体制を充実し整えるべく努力していきたい。

講演Ⅳ

「東北アジア研究センターにおけるロシア研究活動」

= ロシア関係研究活動と訪問講座の紹介 =



最後の講演は、東北アジア研究センター副センター長の岡 洋樹教授から、40余枚のスライドを用いてセンターでの最近のロシア関係の研究活動と訪問講座などの交流活動に焦点を絞り説明が成された。

< 本センターとロシア科学アカデミー・シベリア支部(SB-RAS)等との交流 > 本学とロシアとの交流の歴史は長く、1991年に当時の本学総長の西沢潤一先生がロシア科学アカデミー・シベリア支部(=SB-RAS)訪問団を送り交流を始めたのがきっかけであった。本学の多くの分野の研究者から成る訪問団はその後1995年の第5回まで毎年派遣され、SB-RASの研究者との幅広い交流が続けられた。1992年には東北大学とSB-RASとの間で大学間学術交流協定が締結され、1996年には東北アジア研究センターが設置された。その後も本学総長とSB-RAS総裁レベルの交流も続いている。

< 本センターとロシアとの学術交流例示 >

センターでは現在までロシアから26名の客員教員を受け入れる

など活発な人的交流を続けている。センターが世話部局となって行った本学とロシアとの大学間学術交流協定は、SB-RASならびにノボシビルスク国立大学との締結がある。センターとの部局間協定は、SB-RAS スカチョフ森林研究所、ロシア科学アカデミー極東支部経済研究所、ならびにSB-RAS 人文学・北方民族問題研究所と締結している。シベリア連絡事務所（現在、共同ラボトリー）の活動内容例として、学術シンポジウム開催、訪問講座「日本とアジア」開講、学術書籍・資料の収集、シベリア科学技術情報の収集と提供、個別テーマによる国際共同研究の推進などが挙げられる。

< ロシアに関わる研究テーマの例示 >

以下のテーマに関し、それぞれ背景目的など詳しく説明が成された。「前近代における日露交流史料研究」、「シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究」、「ロシア地方部におけるシベリア地域研究動向にかかわる調査研究と地域研究データベースの構築」、「旧ソ連を中心とするポスト社会主義世界におけるマイノリティ・ビジネスの展開と私的所有観生成についての学際的研究」、「二十世紀の東北アジアをめぐる中国・ロシア史の課題と展望」、「旧ソ連圏アジア史地域の学術・教育におけるアイデンティティ再構築に関する研究」、「西シベリア塩性湖チャーニー湖における高次消費者を中心とした生態系解析」、「ロシアと中国の民族政策史の研究」、「シベリア抑留死亡者名簿」「シベリア先住民社会の社会人類学的研究」、「NOAA 画像データベース」、「シベリアの生態環境の研究」

< ロシアに関わるシンポジウムの例示 >

開催に際しては、意識的にロシア一ヶ国や特定分野に限定せず、各関係国各分野を専門とする研究者を一堂に会して徹底的に議論する事を旨として開催しており、最近の例としては「帝国の貿易（キヤク国境貿易）」、「歴史の再定義（旧ソ連圏アジア諸国における歴史認識と学術・教育）」、「東北日本とロシアーその過去と現在」、「ロシア先端科学技術に関する ISTC Japan Workshop」、などがある。

以上は研究に関する事項の説明、次いで最近の学術交流活動の一例が説明された。

< 訪問講座「日本とアジア」 >

この講座は本センターのロシア関係研究活動に対する寄付（小松資金）を活用して、本センターおよび東北大からなる講師を中心に先方に出かけ、日本研究およびアジア研究の出前講義を行おうとするもので、一昨秋にノボシビルスク国立大学と講座実施に関わる協議・協定を締結し、その時に第1回目を開催している。

以下に述べる第2回目は、2009年11月19日～20日にノボシビルスクで3人の講師による講義（東北大学大学院文学研究科長岡龍作教授「日本の美術にみる自然表現と宗教観」、尚綱学院大学千葉正樹教授「宮崎アニメの歴史認識：教育現場への浸透が意味すること」、東北大学東北アジア研究センター岡洋樹教授「近代日本人とユーラシア」）を、日本語で日本人学生に行なう調子で実施した。聴衆はノボシビルスク市にある大学の日本語専攻の学生で、当初どの程度理解できているかが心配だったが、その翌日に行なわれた現地学生の聴取感発表を聴き、心配は驚きが変わった。全て正確で流暢な日本語を操り、しかもその内容は3講師の講義内容を十分消化し織り交ぜての「日本の若者文化」とか「日本のバブル経済」など深く掘り下げたものであり、講師のコメントにも適正に反応していた。アンケートを実施したところ、日本語を3年間学んでいる学生は3講師の講義内容を殆んど理解できたという驚くべき結果が得られた。つまり、3年目で日本の大学の講義内容が十分解るといふ、非常に効率のよい日本語教育がなされている。



< 東北大学とロシアの研究・教育の可能性 >

すでに、東北大学とSB-RAS、ノボシビルスク国立大学との交流は大きく蓄積されており、文化にしても経済にしても、ロシアでの日本への関心は非常に高いものがある。ノボシビルスク大学における日本語教育の高い水準も、その一つの表れと言える。学生は非常に優秀でまじめ、熱心であり、彼らを留学生として受け入れることは日本にとって非常に有効であると確信している。

<< 質疑応答 >>

Q：今後の訪問講座の予定は？

→A：2008年から5年間の予定なので、あと3回、講師2名程度で実施する予定である。

(以上文責 事務局)



今号の「うしとら」は本年5月7日に東北大学東京分室で開催された東北アジア学術交流懇話会総会・一般講演会の特集です。

発行が多少遅れましたが、参加できなかった方々にも会議の内容や会場雰囲気がお判りいただけるように心がけ、作成しました。

(石渡 明)

《うしとら》(東北アジア学術交流懇話会ニューズレター) 第45号 2010年7月30日発行

発行 東北アジア学術交流懇話会

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41 番地 東北大学東北アジア研究センター 気付

PHONE 022-795-7580 FAX 022-795-6010

http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/ E-mail: gon@cneas.tohoku.ac.jp